



巻 頭 言

「時には非効率を楽しもう」

教育支援センター長 藤田直幸

まだまだ自分は若いつもりでいたのに、かつて自分が見て「おじいさんだな」と思っていた先生方と同じような年齢になり、気づけば定年まで一年になった。実際、かわいい孫もいて「おじいちゃん」と言われている。そんな爺さん先生の私が最近夢中になっているのがAIである。毎日使うようになっていくが、これが便利。すごく便利だ。授業づくりにも活用し、「探究型の課題」を作るには欠かせなくなっている。今年に入り、Pythonで業務を効率化しようと学び始めたが、分からないエラーに悩まされ続けた。そんな折、「企業ではプログラミングにもAIを使っている」と聞き、試しに成績グラフを大量に作るプログラムをAIに頼んでみたところ、半日でプログラムが完成してしまった。「あらら」である。

技術の進歩は、人々のライフスタイルを大きく変える。私が子どもの頃、家に電話もなく、テレビは白黒だった。高専1年生で初めて触れたコンピュータはパンチカード式で、一文字のミスでカードを作り直すという世界だった。1992年に教員になったころも、学生はワープロ専用機で卒論を書いていた。そこからインターネット、スマホ、そして生成AIへ。担任している学生たちと同じ2008年にスマホが誕生したことを思うと、技術の変化の速さにあらためて驚く。昔を振り返り語りだすのは爺さんになった証拠。だが、アナログからデジタルへ移り変わる過程を体感できたことは、電気電子系の教員として幸運だったと思う。

さて図書館だよりなので、読書の話も少し。私は小学生の頃から本が好きで、図書委員をしていた。週末はいつも本を借りて帰っていた。中学・高専では武者小路実篤や太宰治などをよく読み、レポートを書くときは図書館で専門書を借りて調べた。学校の図書館では足らず、大阪の中之島図書館まで行っていた。当時は検索システムもなく、カードの束をめくって本を選び、書庫から取ってきてもらうという、今思えばとても面倒なことをしていた。

ところが最近、自分でも本を読まなくなったなあと思う。調べ物はネット、知識はYouTube。さらにAIを使いだすと便利すぎて手放せない。そこにあるのは、圧倒的なスピードと手軽さだ。手に入る情報量は、昔の何倍、何十倍にもなった。

しかし、不便だった昔を振り返って気づくのは、あの頃手を動かしたり、足を運んだり、頭を絞ったりした「手間」こそが、今でも自分を支える知識や知恵になっているということだ。本をじっくり読むことで、自分の生き方に大きな気づきがあったり、傷ついた心が癒されたりした。本を通して自分と向き合う時間は、決して効率化できるものではない。

AIを使いこなすときにも、実は「順序立ててやってほしいことを伝える論理的な力」が必要になる。成績処理のプログラムを作ってもらうときも、ちゃんと指示を出さないとAIは正しい答えを返してくれない。こうした「本質を見抜く力」や「筋道を立てる力」は、インスタントなネット情報の流し読みだけではなかなか身につかない。

人と直接触れ合うこと、何かに挑戦して失敗すること、そして一冊の本とじっくり向き合うこと。そんな、一見「非効率」に見える時間の中でこそ、自分の血肉となる力がつくように思う。爺さん先生は、アナログな不便さを知る世代でよかったなと思いつつ、最新のデジタル技術も今後も楽しんでいこうと思う。もちろん、この原稿もAIに助けってもらって書いた。便利なものは賢く使って、浮いた時間は「非効率」を楽しむ。皆さんも、この図書館という場所を、単なる情報の保管庫ではなく、自分と向き合う場所にしてほしいと思う。